



平成 27 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

		ひょうごけんりつこくさいこうとうがっこう					兵庫県
27 31		兵庫県立国際高等学校					
						国際科 総在籍者数 359 名	
国際科	120	120	40		280		
	移民研究を通して未来の日本の選択肢を提案するプロジェクト						
	移民研究の上に今日的な国内問題の学習を積み重ね、「世界の人々が共に生きる場所」としての未来の日本の選択肢を導き出し提案する課題研究を実施し、グローバル・リーダー育成に資する教育プログラムとして完成する。						
	-1	<p>(1)</p> <p>本格的な多文化共生社会の到来により、私たちは国際問題と国内課題を一体的に取り扱わなければならない。共生社会に生じる課題や困難を克服し、この国を世界の人々が共に生きる豊かな場所として発展させる役割を担うグローバル・リーダーの育成を目指す。国際高校が目指すグローバル・リーダーとは、多文化を受容し、自ら発信し、社会に貢献できる人材のことである。多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟にとらえ、未来に向けて建設的な考え方ができるグローバル・リーダーとしての資質を培うことを目的とする。</p> <p>この目的のため、国を越え人々が移り住む国際社会の重要側面である「移民」に焦点を当て、“安全に、幸せに暮らす”という生活に根ざした視点から国際問題の諸相に迫るとともに、国内問題に視点を移し、この国の可能性、役割、ニーズ等を取り出し、未来の選択肢を提案する課題研究を実施し、社会に発信することを目標とする。</p> <p>課題研究の過程で「世界移民マップ」を作成し、日本における移民マップ研究のハブ校を目指す。そして、これらを進める教育活動をプログラム化し、成果を評価する手法と合わせて研究開発する。</p> <p>(2)</p> <p>開校以来 12 年の教育活動を通して、国際貢献や世界を志向する意識の醸成と高い英語力の育成が達成できている。これに、グローバル・リーダー育成の要素を加える教育プログラムを本校において開発するための仮説は以下である：</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 「人はなぜ国を越えて移り住むのか」の問いに始まり、国際問題と国内課題を結びつけて研究を進め、その先にこの国の選択肢を描く課題研究を通して、グローバル社会の諸課題を生徒のそばに引き寄せ、知識意欲と継続的な自己開発意欲を醸成する。 ② 異文化理解を重視する教育方針、外国籍・多重国籍の生徒の在籍、20 か国以上の国籍の児童生徒が学ぶ兵庫県立芦屋国際中等教育学校との施設の供用、など他にない学習環境のもと、この環境に則した研究テーマを掲げることで、学校全体が国際科である強みを生かした生徒総がかりの活動を展開し、リーダー育成につながる厚みのある人材層と知識基盤を築く。 ③ 「世界移民マップ」作成の過程で、膨大な英語の情報源から有効なデータを探し当てる力、海外の交流校や関係団体と交信する力、データを集約して有効な情報を構築する力を育てる。同時に、マクロ的な世界観の醸成を図る。 ④ 6 つの第二外国語、「外国語としての日本語」等の言語に関する授業に重点を置く中、言語技術の習得により、論理的な思考力と言語活用力を強化する。 <p>(3)</p> <ol style="list-style-type: none"> ① S G H 課題研究発表会を開催し、保護者、地域住民、教育関係者に公開する。 ② S G H 指定校と「提案日本の選択」の発表内容を共有し、提案の価値を高める。 ③ ホームページ、研究報告冊子、オープンハイスクール等を通して広く公開する。 					

	-2	<p>(1) 関西学院大学の国際学部、社会学部、総合政策学部との連携を軸に以下を進める： 【目的】 移民研究を通して、未来の日本の選択肢を提案する。 【導入】 「人はなぜ国を越えて移り住むのか」を始まりの問いとし、「安全で幸福な生活」を求める人々の素朴な願いを生徒の日常と比較させる。[基調講演、グループ討議] 【学習】 「移り住む」諸形態をその理由と関連付け、歴史上または現存する課題を調査する。(強制：奴隷貿易、難民：パレスチナ、ミャンマー、スーダン、雇用：米国、欧州、アジア、要請：企業戦略、国家ニーズ、など) [大学教員講義・指導、協力企業への訪問調査・講義、発表会による相互学習] 【調査】 各国の人の流出と受入れの実態を調査して「世界移民マップ」を作成、同時に移民の背景と課題を抽出する。[グループ研究、大学教員指導、海外交流校連携] 【体験】 海外交流校を訪問、課題研究を共有し、意見交換や情報収集をする。ホームステイを通して異文化を実体験する。[5泊7日の海外研修、4泊ホームステイ] 【研究】 移民研究の成果を基盤に国内課題に着眼、両者を総合して、世界の人々が生きる場所として発展するための日本の選択肢を考察し論文としてまとめる。学校設定科目の学習成果を活用することで、研究内容の深化を促進する。 [各自研究、大学各学部教員による指導、下級生への成果還元、辻説法] 【発表】 「提案日本の選択」として論文をまとめ、発表する。 [SGH課題研究発表会、研究支援者による評価、SGH指定校との共有]</p> <p>(2) 【1期】 1年次1、2学期に全生徒が導入、学習、調査を実施する。並行して、調査、研究に必要な基本的スキルの育成を図る。世界の諸課題とその解決に携わる人々、大学での研究について学習し、進路、高等教育への意識付けを行う。 [科目「社会と情報」と連携を図りつつ、「総合的な学習の時間」1単位をSGH課題研究として実施する] 【2期】 1年次3学期から2年次2学期に全生徒が海外研修と連動して実施する。移民研究を進める班と日本の紹介と外国から見た日本を調査する班に分かれて交流校との共同学習を進める。[総合的な学習の時間2単位をSGH課題研究として実施する] 【3期】 2年次3学期から3年次2学期に、グローバル・リーダー・コース(GLC)選択生徒40名が実施する。選択する学校設定科目と関連して課題設定し、全生徒で築いてきた移民研究の成果をもとに、日本の選択肢を研究し論文としてまとめる。この間、下級生の課題研究に参加し研究成果を下級生指導に活用する。 [2016年度に3年次生を対象とした「提案日本の選択」科目を開設] 【検証】 「パフォーマンス評価」を活用、生徒の自己評価による自律した学習者の育成を図る。英語教育のCan-Doリスト活用実績を参照し、課題研究への拡大展開を図る。教育評価を専門とする大学研究員と共同で評価法を開発する。</p>
	-3	<p>(1) 【言語技術習得】 世界基準の言語教育である「言語技術」習得を目指した研究開発を行う。国語教育に言語技術を導入し、ロジックの「型」を学びながら、読解、対話、説明、報告、記録、議論、論文作成を行う。また、国語版Can-Doリストを作成し活用する。英語教育は、Can-Doリストを活用した授業改善を継続し、連携大学等によるスピーチ、プレゼンテーション等の指導を受ける。[2016年度学校設定科目として選択科目「言語技術」を開講] 【議論創出空間】 特徴ある幅広い中央廊下を、生徒の議論が生まれる相互学習空間とする。GLC選択生徒が分担して、定期的に課題研究のテーマに関する「昼休み辻説法」(公開プレゼンテーション)を行う。(中央廊下は、県立芦屋国際中等教育学校との共用空間)</p>
		<p>本校と同じ校地内に併設された県立芦屋国際中等教育学校(学校組織は全く異なる)は、1学年80名、内30名が帰国生徒、30名が外国籍を持つ生徒、20名がそれ以外の生徒という構成で、異文化、並びに異なる年代の生徒と交流できる環境にある。また、兵庫県教育委員会の子ども多文化共生センターも同じ敷地内に設置されている。</p>

